

筑波経済月報

No.126

2024.

1

企業探訪

システム業界の宮大工を目指すプロフェッショナル集団

株式会社シーアンドエーソリューション

支店長のわがまち紹介

「天心が想い、大観が描き、雨情が詠んだ」感動のふるさと 北茨城

北茨城市

常陸時代の佐竹氏 -500年の軌跡を追う- (第7回)

佐竹氏家紋誕生の地・「古多橋駅」

新春レポート

2024年の国内外経済の展望と新年の話題について

経営お役立ち情報

日本企業が海外進出を成功させるためのポイント

筑波総研 株式会社





常陸大津の御船祭

おふねまつり



(写真提供／北茨城市)

「常陸大津の御船祭」は、海上の安全と大漁を祈願し5年に一度行われる、大津町にある佐波波地祇神社の春の例大祭。2017年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。

最大の特色は、「船を用いての陸上渡御」で、日本の祭りでは唯一のものといわれています。

祭りは、船の両側に海の幸を描き、御輿を乗せた「神船」を、水主(歌子)の歌う御船歌や囃しにあわせ、500人ほどが引いて町中を練り歩きます。船底に車輪はなく、ソロバンとよばれる井桁状に組んだ木枠を敷き、20～30人の若者が船縁にとりつき左右に揺らしながら木枠の上を滑らすように引いていく、見ごたえのある勇壮な祭りです。

佐波波地祇神社に伝わる史料によると、いまから約300年前の江戸時代享保期には、すでに祭りがあったことがわかります。また、記述の中に「神船を浮かべ、神輿を安置し…」とあり、かつては海上渡御が行われていたという説の有力な根拠となっています。

2004年の御船祭までは、実際の木造漁船を使用していました。現在は祭事用の船で行っていますが、『常陸大津の御船祭総合調査報告書』では、船型山車等とは一線を画し、「漁船」として扱うと明記されています。

祭事船は、新たに国の補助を受けて兵庫県姫路市の船大工によって作られ、2023年4月22日に漁業歴史資料館「よう・そろー」で竣工式が行われました。現在、祭事船は「よう・そろー」で一般公開されています。

次回の祭りの開催は2024年5月2日と3日。5年に一度、しかも新しい祭事船が登場するというまたとない機会に、ぜひ足をお運びください。

- ◆開催地
佐波波地祇神社(北茨城市大津町1532)とその周辺
- ◆アクセス
車 常磐自動車道「北茨城IC」から約20分
- ◆お問合せ
北茨城市観光協会 電話0293-43-1111

